

各関係機関団体の長 } 殿  
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長

平成24年度病虫害発生予報第3号（6月）について

このことについて、病虫害発生予報第3号を発表したので送付します。

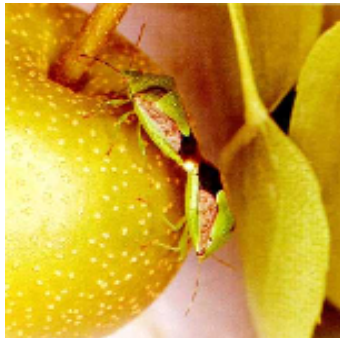
### 予報第3号

#### チャバネアオカメムシの果樹園への飛来に注意しましょう！

5月上旬以降、チャバネアオカメムシのフェロモントラップでの誘殺数が急激に増加しています。本年の越冬量は平成17年以降最も多く、今後、モモ・スモモ・ウメ・ビワ・ナシ等で、果実の吸汁害が心配されます。

園内外での発生状況の把握に努め、飛来が多く被害が予想される場合は、薬剤防除を行いましょ

う。



ナシの幼果上のチャバネアオカメムシ



モモの被害果

#### チャトゲコナジラミの苗木による拡散を防止しましょう！

平成21年7月に八女市星野村の茶園で初めて確認されたチャトゲコナジラミは、徐々に発生地域が拡大し、平成24年5月には立花町を除く八女市のほぼ全域、八女郡広川町、うきは市で発生が確認されています。

本虫は寄生苗木の購入～定植によって分布が拡大するので、発生地域から苗木を購入する場合は、寄生の有無を十分確認し、寄生苗は定植しないようにして下さい。

また、チャ以外にもツバキ科のサカキ・ヒサカキ・ヤブツバキ・サザンカや、シキミ科のシキミ等にも寄生します。

発生が確認されている地域で、これらの樹種を生産～流通される場合は、苗木での寄生に留意して下さい。



チャ苗木に寄生しているチャトゲコナジラミ幼虫

6月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

**主な病害虫の発生予報概要**

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (6月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	ヒメトビウンカ (縮葉枯病) *ヒメトビウンカの保毒虫率と発生量	—	やや多	並
かんきつ	そうか病 ミカンハダニ	少 並	少 並	少 やや多
なし	黒星病	並	並	並
ぶどう	黒とう病	並	並	やや少
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	並 やや少	並 やや少	並 やや少
いちじく	アザミウマ類	少	少	やや少
果樹共通	カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)	多	多	多
アスパラガス	アザミウマ類	並	並	やや多
茶	炭疽病 もち病 チャノコカクモンハマキ カンザワハダニ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ	多 多 並 やや少 並 並	やや多 多 並 並 並 並	やや多 多 並 並 やや多 やや多

注：果樹共通・カメムシ類の平年比について、現況は年次変動が大きいので、前年比としている。  
また、6月の発生予報の平年比は、越冬量が比較的多かった平成22年比としている。

**<予想される向こう1か月の天候（平成24年5月26日～6月25日）>**

前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。  
向こう1か月の気温、降水量、日照時間は平年並でしょう。  
週別の気温は、1週目は高く、2週目は平年並みか低いでしょう。

**向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）**

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	30	40	30
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区気象台 平成24年5月25日発表抜粋)

## 作物別発生予報

注①：この予報は病虫害防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。

注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

### 【普通作物：水稲】

#### 1 ヒメトビウンカ（縞葉枯病）

##### （1）予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

発生地域：県下全域

##### （2）予報の根拠

ア 5月5半旬に行った小麦での片振り20回すくい取り調査の結果、ヒメトビウンカの発生量は第一世代成幼虫が41.2頭（平年 28.8頭、前年 38.1頭）で、平年より多かった（+）。

イ 越冬世代ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、12.3%（過去9ヵ年平均 6.8%、前年 12.6%）であった（平成24年度病虫害発生予察注意報第1号参照）（+）。

##### （3）防除上の注意

ア 5月5半旬の小麦におけるすくい取り調査の結果、ヒメトビウンカの中齢幼虫の比率が高かった。小麦収穫が遅れる程、成虫の比率が高くなり水稲への飛来量も多くなると考えられるので、小麦の収穫時期が遅くならないよう適期収穫を徹底する。

イ ヒメトビウンカの第一世代成虫は5月下旬～6月上旬にかけて移植後の水稲に飛来するので、早植水稲では移植直後から成虫の発生状況に注意し、発生が多い場合は防除を実施する。

ウ ヒメトビウンカの水稲苗への飛来防止のため、麦類作付ほ場の近くやエノコログサ、イタリアンライグラス等のイネ科植物が繁茂した場所では、育苗を避ける。

また、前年度に縞葉枯病が多発したほ場では、田植え時期を可能な限り遅らせる（麦収穫後の6月10日以降）。

エ ヒメトビウンカに効果のある箱施薬剤を施用する。

箱施薬剤は農薬使用基準（投下薬量）を厳守し、育苗箱全面にむらなく散布する。散布後は水稲への速やかな吸収を促すため、かん水を行う。

なお、育苗箱で農薬を散布する場合は、育苗箱の下にビニルシート等を敷き、地面への薬剤の浸透防止に努める。

オ 縞葉枯病の発病株を認めたら、直ちに除去する。

### 【果樹：かんきつ】

#### 1 そうか病

##### （1）予報の内容

発生量：平年、前年より少。

##### （2）予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

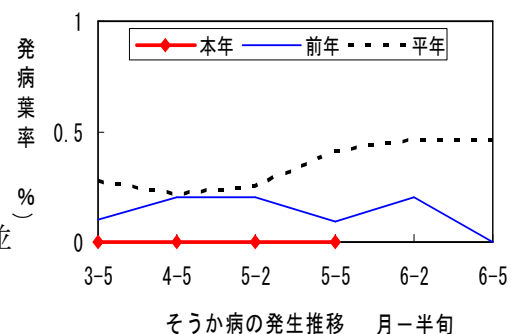
発病葉率 0%（平年 0.4%、前年 0.1%）

発生ほ場率 0%（平年 31.0%、前年 8.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

##### （3）防除上の注意

伝染源となる罹病葉を除去し、幼果期の防除を徹底する。



## 2 ミカンハダニ

### (1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多。

### (2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生葉率 13.3% (平年 11.3%、前年 2.8%)

発生ほ場率 41.7% (平年 57.9%、前年 50.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

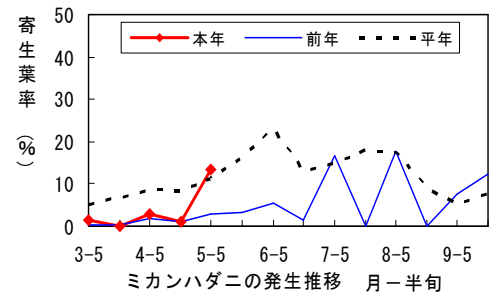
### (3) 防除上の注意

ア 高度精製マシン油乳剤は、発生密度が高い場合には十分な効果が得られないので、発生が多くなる前に散布する。

なお、落花期以降にデラン剤を散布した園地では、薬害が生じる恐れがあるので使用しない。

イ 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



## 【果樹：なし】

### 1 黒星病

#### (1) 予報の内容

発生量：平年・前年並。

#### (2) 予報の根拠

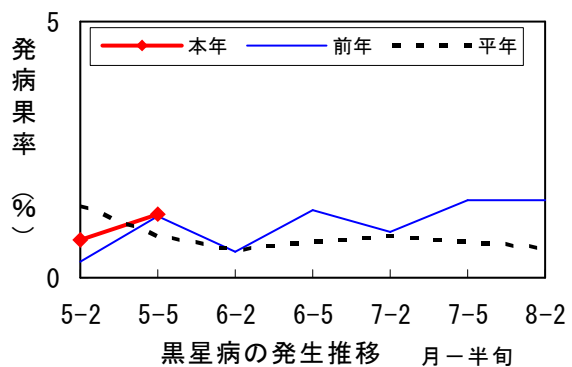
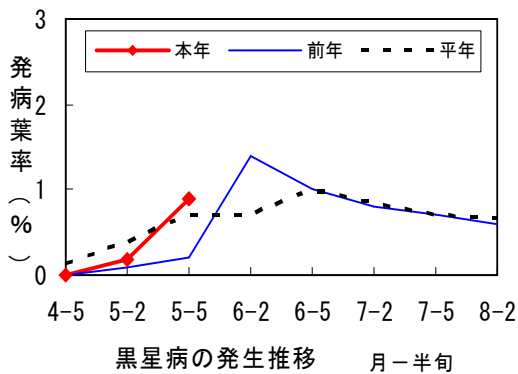
ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.9% (平年 0.7%、前年 0.2%)

発生ほ場率 (発病葉) 41.7% (平年 44.8%、前年 33.3%)

発病果率 1.3% (平年 0.8%、前年 1.2%)

発生ほ場率 (発病果) 50.0% (平年 29.0%、前年 41.7%)



イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

#### (3) 防除上の注意

ア 罹病葉や罹病果実は伝染源となるので、除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

## 【果樹：ぶどう】

### 1 黒とう病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生は平年並であった(±)。

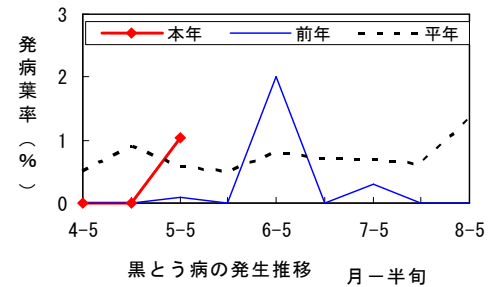
発病葉率 1.0% (平年 0.6%、前年 0.1%)

発生ほ場率 11.1% (平年 19.9%、前年 11.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病葉及び罹病新梢は、除去し、園外に持ち出し処分する。



## 【果樹：かき】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生は平年並であった(±)。

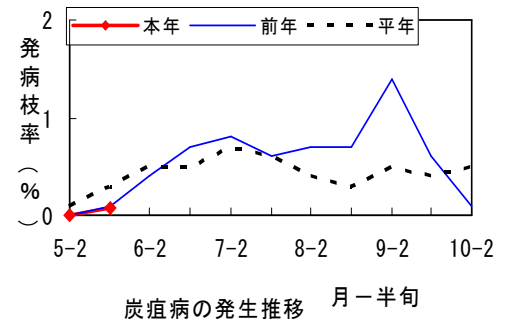
発病枝率 0.1% (平年 0.3%、前年 0.1%)

発生ほ場率 7.1% (平年 17.4%、前年 21.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は、除去し、園外に持ち出し処分する。



### 2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

寄生枝率 1.0% (平年 2.6%、前年 2.5%)

発生ほ場率 21.4% (平年 56.0%、前年 35.8%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

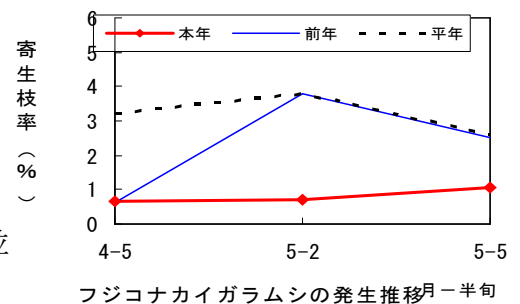
ア 本年のフジコナカイガラムシ雄成虫のフェロモントラップ誘殺数ピークから予想した第1世代幼虫の孵化最盛期は、6月上旬～中旬である。

イ 第1世代幼虫の孵化時期は防除効果が高いので、10日間隔で2回防除を実施する。

孵化時期はほ場によって差があるので、防除前に孵化幼虫の有無を確認する。

ウ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらのないよう丁寧に防除する。

エ 薬剤散布に当たっては、極力、天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



**【果樹：いちじく】**

**1 アザミウマ類**

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや少。

(2) 予報の根拠

ア 5月1半旬～5月4半旬までの誘引剤における誘殺虫数は、平年より少なかった（－）。

（調査地点：行橋市西泉）

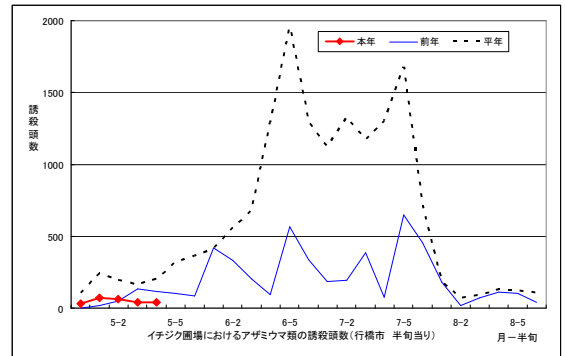
誘殺虫数 215頭（平年 802頭、前年 318頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 園地周辺の6～8月に開花する植物でも増殖するので、畦畔等の除草に努める。

イ ほ場で発生が認められたら定期的に薬剤防除を行う。



**【果樹：共通】**

**1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ）**

(1) 予報の内容

発生量：前年・前々年より多（平成14年より少）

**\* チャバネアオカメムシの年度別発生概況**

（平成24年）（平成23年）（平成22年）（平成14年）

	本年	前年	前々年	<参考>
越冬量（頭/㎡）	3.6	0.7	2.0	4.6
ヒキ球果着生量	—	中	やや少	中
発生型	—	後期	後期	前期

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たり越冬量は、県平均で3.6頭（前年 0.7頭、前々年 2.0頭）で、前年・前々年より多かった（＋）。

イ 4月1半旬～5月5半旬までの予察灯の誘殺虫数は、前年・前々年より多かった（＋）。（調査地点：筑紫野市）

チャバネアオカメムシ 1,145頭（前年 285頭、前々年 387頭、<平成14年 4,319頭>）

（調査地点：八女市黒木町）

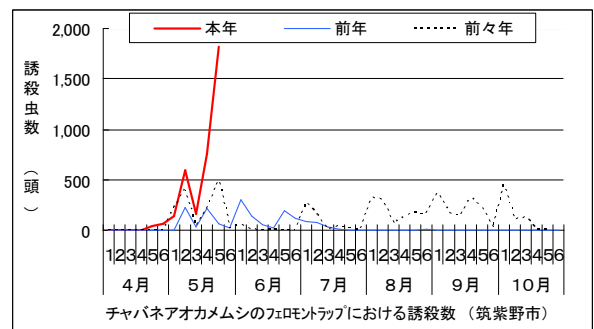
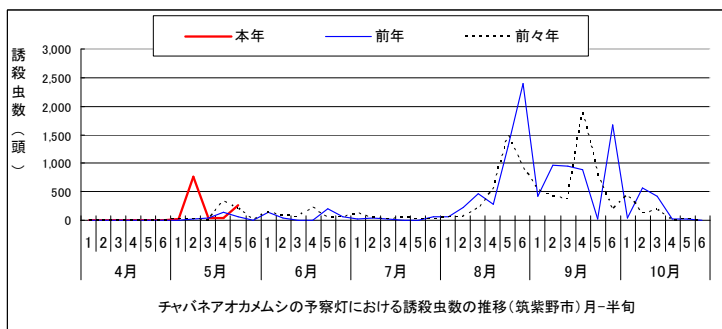
チャバネアオカメムシ 95頭（前年 257頭、前々年 125頭、<平成14年 1,186頭>）

ウ 4月1半旬～5月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は、前年・前々年より多かった（＋）。

（調査地点：筑紫野市）

チャバネアオカメムシ 3,585頭（前年 549頭、前々年 871頭、<平成14年 5,415頭>）

エ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている（±）。



(3) 防除上の注意

- ア 気温が高い場合、地域によってモモ・スモモ・ウメ・ビワ・ナシ園等に飛来することが予想される（平成24年度病害虫発生予察速報第4号参照）。
- イ 常発地では、園内における飛来状況の把握に努め、飛来を多く認めたら直ちに防除を行う。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (6月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ アブラムシ類	やや少	やや少	やや少	・適期防除を心掛ける。
なし アブラムシ類	やや少	やや少	やや少	・薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
ハダニ類	やや少	やや少	やや少	
ぶどう べと病	並	並	並	・伝染源となる罹病葉は除去し、園外に持ち出し処分する。
かき うどんこ病	やや多	やや多	やや多	・多発園では8月下旬に、炭疽病との同時防除を行う。 ・幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤散布に際しては、高圧で十分量を散布する。
ハマキムシ類	やや少	やや少	並	

【野菜：アスパラガス】

1 アザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 67.8% (平年 61.2%、前年 51.1%)

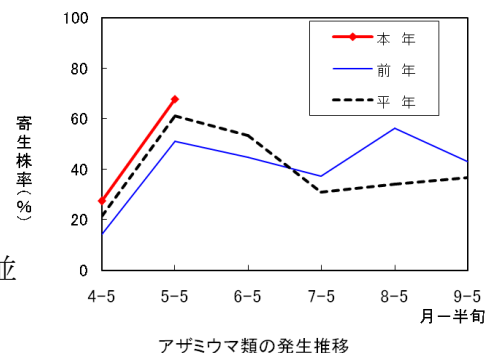
イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア ハウス周辺の除草を徹底する。

イ 本虫は最初擬葉に発生するが、微小で見つけにくいいため、白い紙等の上に払い落として発生量を推定する。

ウ 多発してからでは防除が困難になるので、初期防除を徹底する。



## 【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (6月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予防散布を行う。</li> <li>・ハウスのつま面を開放し、湿度の低下を図る。</li> </ul>

## 【茶】

### 1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉数 0.65 葉 (平年 0.003 葉、前年 0 葉)

発生ほ場率 25.0 % (平年 0.8%、前年 0%)

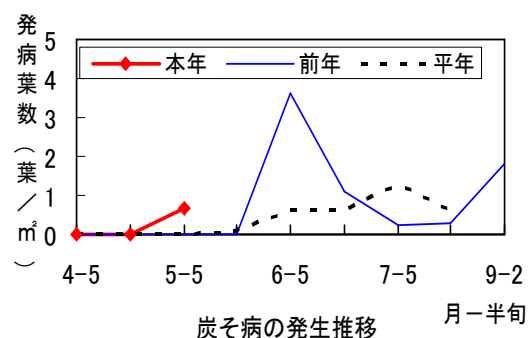
イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



### 2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多。

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

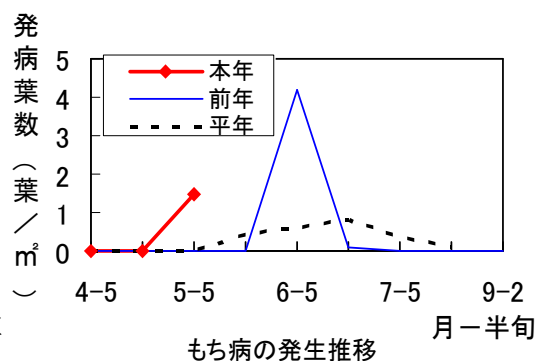
発病葉数 1.5 葉 (平年 0 葉、前年 0 葉)

発生ほ場率 50.0 % (平年 0%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。



### 3 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並。

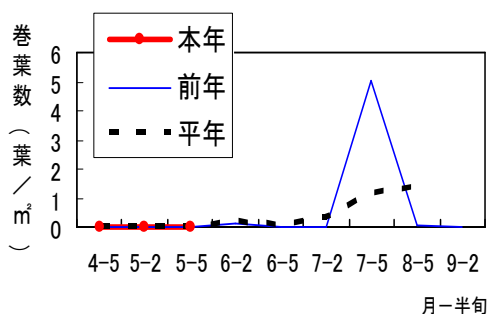
(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 0 葉 (平年 0.03 葉、前年 0 葉)

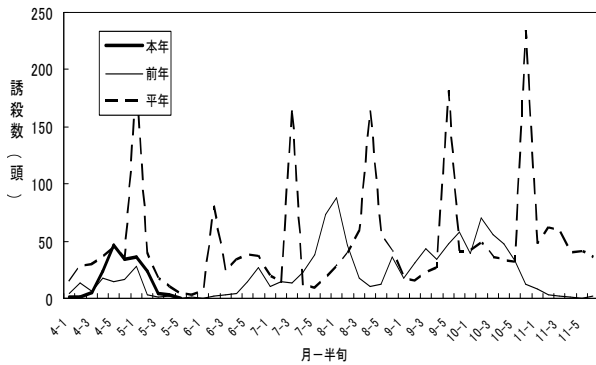
発生ほ場率 0% (平年 4.0 %、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

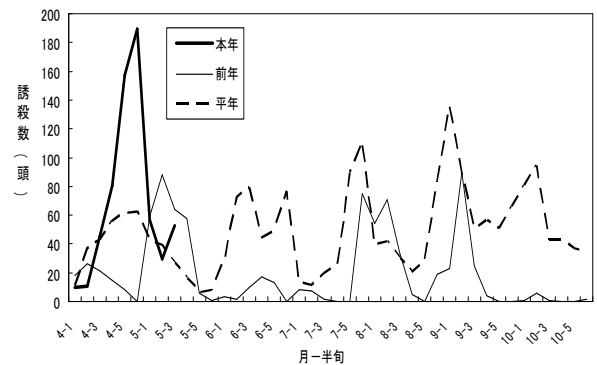


チャノコカクモンハマキの発生推移





7.10Eトラップによるチャノカガヤハマキの誘殺数(筑後市)



7.10Eトラップによるチャノカガヤハマキの誘殺数(八女市)

(3) 防除上の注意

- ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、6月中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

4 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並。

(2) 予報の根拠

- ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(一)。

寄生葉率 1.9% (平年 3.2%、前年 2.2%)

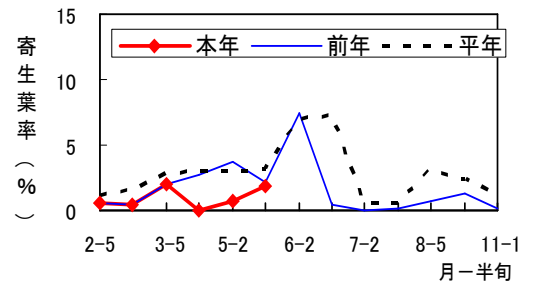
50葉当たり虫数 1.2頭 (平年 4.1頭、前年 1.6頭)

発生ほ場率 37.5% (平年 44.0%、前年 47.1%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、摘採後、速やかに防除を行う。
- イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



カンザワハダニの発生推移

5 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多。

(2) 予報の根拠

- ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

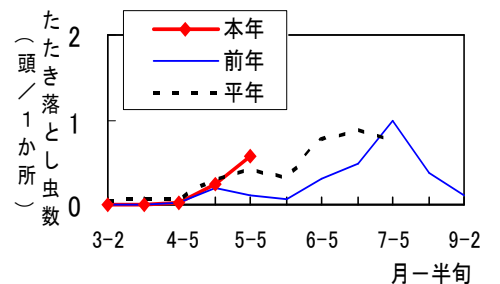
たたき落とし虫数 0.6頭 (平年 0.4頭、前年 0.1頭)

発生ほ場率 50.0% (平年 43.1%、前年 17.6%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 一番茶摘採後、又は二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



チャノミドリヒメヨコバイの発生推移

6 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並。

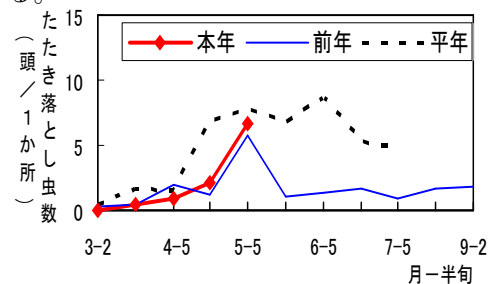
(2) 予報の根拠

- ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

たたき落とし虫数 6.6頭 (平年 7.7頭、前年 5.8頭)

発生ほ場率 100% (平年 83.8%、前年 58.8%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、気温及び降水量は平年並とされている(±)。



チャノキイロアザミウマの発生推移

### (3) 防除上の注意

ア 平坦地では多発している茶園も見られることから、発生状況に注意し、たたき落とし（A4紙上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。

イ 二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。

## 農薬の危害防止に努めましょう ～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月から8月を「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮等について周知しています。

また、農薬による事故などを防止することを目的とした安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に、関係機関・団体が一体となって取り組みます。

散布者の安全はもちろん、人畜、隣接作物、河川等への配慮についてご指導よろしくお願ひします。

なお、平成23年2月4日付けの「農林水産省消費安全局長、環境省水・大気環境局長通知」により、**農薬として「ツバキ油粕」等を使用することは禁止されていますので**、併せてご指導よろしくお願ひします。

### 農薬安全使用運動重点啓発事項

- ① 農薬ラベル確認の徹底  
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)
- ② 散布前における情報提供の実施  
(散布区域に近接するほ場、住宅地、養蜂等の関係者 他)
- ③ 散布時には近隣作物や住宅地等周辺への飛散防止を徹底
  - ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
  - ・飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
  - ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意
- ④ 水田除草剤や本田粒剤は、使用後7日間の止水を遵守
  - ・落水・かけ流しをしない。
- ⑤ 散布後は必ず散布器具（タンク、ホース等）を3回洗浄
- ⑥ 防除履歴の正確な記帳
  - ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>

電子メール [byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp](mailto:byougaichuboujyo@pref.fukuoka.lg.jp)

